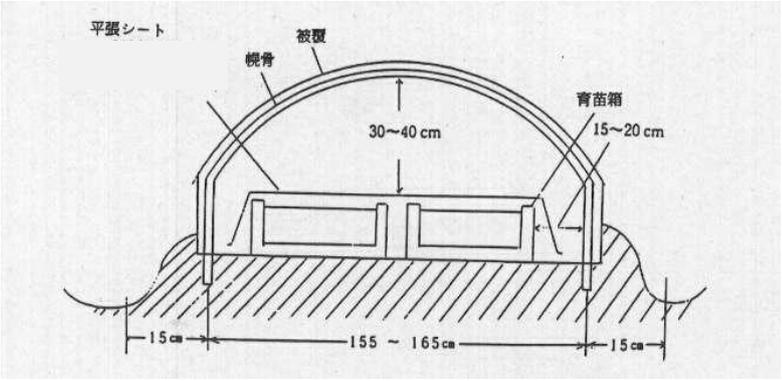


1 作 物

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 麦の管理</p>	<p>(今月の作業管理のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○麦の管理</li> <li>○早期水稻の育苗</li> </ul> <p>農林水産研究所（松山市）における11月中旬は種の平年の出穂期は、はだか麦ハルヒメボシで3月21日、小麦チクゴイズミで3月26日である。今年は12月から暖冬傾向で麦類の生育が進んでおり、1か月予報（2月19日高松地方気象台発表）において平均気温は高い見込みであるため、出穂期が平年より早まると予想される。今後の気象動向をこまめに確認し、適期作業に努める。</p> <p>ア 穂肥</p> <p>穂肥の施用時期は「出穂前30～25日」である。今月は遅まき麦では穂肥施用時期にあたるので幼穂を観察し、幼穂長5～10mmを目安に施用する。</p> <p>穂肥の施用量は、ハルヒメボシ、チクゴイズミともに10a当たり成分量で窒素3kgを基準とするが、中間追肥量や生育状況及び葉色により加減する。</p> <p>なお、穂肥の増量は穂数を増加させるが、ハルヒメボシで茎数の少ない条件下では、遅れ穂を誘発し、成熟の遅れや品質低下を招くため、施用量は基準量を超えないようにする。</p> <p>イ 湿害対策</p> <p>1か月予報では、今後の降水量はほぼ平年並であるが、3月は菜種梅雨と言われるほど雨が多い時期でもある。この時期の湿害は、根の機能障害をもたらし、収量や品質を大幅に低下させる。降雨後の水がほ場外へ排水できるように、適宜ほ場内を見回り、接続されていない排水溝（明きよ）の確実な接続および補修を行っておく。</p> <p>ウ 赤かび病防除</p> <p>赤かび病は多発すると収量・品質が低下するだけでなく、赤かび病菌が産生するかび毒は人畜に有害で、農産物検査では赤かび粒は混入してはならないとされており、麦栽培において極めて重要な病</p> <div data-bbox="970 1778 1382 2047" data-label="Image"> </div> <p>写真1 赤かび病に罹病した穂</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 早期水稻の育苗</p>	<p>害である（写真1）。</p> <p>赤かび病は、開花から約10日間で最も感染しやすく（一次感染）、この時期が温暖（気温15℃以上）で連続降雨があると発生しやすくなる。今年は暖冬傾向のため出穂・開花期が早まり3月下旬頃から防除が必要になると予想される。</p> <p>防除適期は開花期（出穂後5～7日後頃）で、トップジンM水和剤などで必ず防除する。多発が予想される場合はワークアップフロアブルなどで1回目の防除の7～10日後に追加で防除する。なお、追加防除の際は、薬剤の使用回数に注意する。麦の開花状況や天気予報、病害虫防除所の「麦類赤かび病孢子飛散状況調査」を参考に追加防除を判断する。</p> <p>早期の水稻では今月より育苗を開始する。この時期は、まだ寒い日が続くことから、苗立枯病やムレ苗が発生しやすいので、次の点に注意する。</p> <p>ア 用土の準備</p> <p>育苗用土は通気性や透水性が良く、かつ保水性や保肥力が必要である。市販の人工粒状培土などを用いる場合は、品質が保証されたものを用いる。山土や水田土壌を用いる場合は、土壌のpHを4.5～5.0に調整する。肥料は、苗箱当たり成分量で窒素およびカリは1gとし、リン酸は過剰症が出る場合があるので0.8gとする。</p> <p>イ 浸種、催芽</p> <p>種子は塩水選と種子消毒を徹底する。水稻の種子は1日の平均水温の積算が100℃になると発芽するので、それを目安に10～20℃の水温で浸種を行う。コシヒカリやにじのきらめきなどの発芽しにくい品種はやや長めに浸種する。</p> <p>出芽揃いを良くするため、浸種後の催芽を行う。約30℃で高湿度の室内で約1日間芽が出るのを促し、ハト胸状態にする。</p> <p>ウ は種</p> <p>早期栽培では、普通期栽培より育苗期間が長いので、は種量は催芽粃で箱当たり160g以下の薄播きとする。</p> <p>出芽は出芽室や育苗器内の暗黒下で、28～30℃で2～3日保温する。これ以上の高温になると立枯性病害が発生しやすいため、出芽室内の温度を上げ過ぎないように管理する。</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>エ 緑化・硬化</p> <p>芽が5mm程度伸びたら緑化に移る。芽を伸ばしすぎると2段根になるので注意する。なお、緑化移行時に強い光や5℃以下の低温にさらすと葉緑素の形成が阻害され、白化現象が発生するので、育苗シート等で遮光と保温に努める。</p> <p>緑化は、シルバーポリシートのトンネル育苗(図1)が簡易である。昼間は20~30℃に保温・換気し、夜間は10℃以上に保温する。4~5cm程度に伸びたら被覆をはずし硬化に移る。苗の根張りを良くするため、床土が過湿にならないよう注意する。また、低温時期の育苗では、地温低下防止のため午前中にかん水する。</p>  <p>図1 シルバーポリシートによるトンネル被覆の育苗図</p>

(作成 農林水産研究所)